

旅日記研究ことはじめ

塩崎文雄 所員／和光大学名誉教授

こののはじまりは、2009年夏、福井家に家蔵されていた文書との出会いにあった。

福井家は東京市京橋区本湊町（俚俗：鉄砲洲本湊町、現：東京都中央区湊1丁目）で、三代にわたって貸地・貸家業を営んできた家である。したがって、寄託された文書の大半は土地・家屋の図面や権利書、売買契約書、貸地・貸家契約書、家賃簿の類であった。

「福井家文書」の寄託を受けた私どもは、2010年4月から12年3月にかけて研究プロジェクト「東京一市民のくらしと文化——震災復興期から戦災復興期まで」を立ち上げて史料の整理と分析とにあたった。明治・大正・昭和の三代にわたって東京下町の一隅に生きた、無名の人びとのくらしと文化を考えようとしたのである。その成果は『東京をくらす——鉄砲洲「福井家文書」と震災復興』（八月書館、2013年3月刊）にまとめることができた。

ところで、「福井家文書」の整理にあたる最中^{さなか}に、私どもの意識から欠落していた鉄砲洲本湊町という町の性格に改めて気付かされるということがあった。江戸（東京）の下町と山の手とを分節する指標は舟運の便／不便にある、という点である。かつて、本湊町は町名にも謳われているように「湊（港）町」であった。^{かし}河岸には揚場もあり、^{あげば}船路の目印（山当て）の役割を担う鉄砲洲稲荷（湊富士）もあった。遠く八丈島や紀州から回漕されてくる黄八丈や備長炭が本湊町に陸揚げされたのである。福井家の人びとが携わった貸地・貸家業という家業柄、町内に保有する地所や貸家をいかに運用するかという業務内容は、町の成り立ちと深くかかわっていたのである。前掲の『東京をくらす』に収めた鈴木努の「本湊町建て直し」が示唆するように、第二次大戦前後に、石川島播磨重工業の関係者が多く店子になっていた点にも同じことがいえよう。^{たなこ}

こうした町の性格に気付かされた2009年10月に、幸便にも和光大学連続市民講座『新・世界都市物語——ニッポン・町・移り変わり』の担当を委嘱されるということがあった。研究プロジェクトの一員奥須磨子は「明治前期、村から旅

立つ人々」というテーマで、塩崎は「消えた川筋——中央区新川界隈から」という切り口で、〈江戸湊〉を捉え直す機会に恵まれたのである。

奥は、寺内正毅の妻子（息は寺内寿一）が東京の夫のもとに赴くために周防国宮野村（現：山口市宮野下）を出立する際（明治18年〈1885〉12月）に履まなければならなかった諸手続き（通行手形はすでに必要とされなかったが、本貫の地を離れるにあたっては煩瑣な規制があった）と、三田尻港（現：山口県防府市）から東京への旅程について、「旅行録」（明治9年〈1876〉～明治18年〈1885〉の宮野村住民旅行綴）をもとに考察した。あわせて、村人の多くが旅行の目的地として挙げた江戸（東京）の名所・旧蹟を整理してみせた。たとえば蔭間茶屋などで賑わい、江戸屈指の盛り場であった芝神明を、宮野村の人びとはどうやら社寺参拝と思い込んでいた節があって、すこぶる興味深い。

塩崎は灘の「下り酒」を一手に売り捌いた、本湊町からほど近い新川沿いの酒問屋街（霊岸島四日市町および霊岸島白銀町）、なかでも明治の写真大尽として名高い鹿島清兵衛に焦点を当てて考えてみた。その成果は『東京をくらす』のなかにも織り込むことができたのである。

それとは別に、『東京をくらす』には福井家の人びとのありようを掘り下げるために、別に二つの視座を設けた。関東大震災直後に、学校法人成城学園が主体となって行った郊外住宅地開発がその一つである。山の手の奥の奥、「いっそ小田急で逃げましょか」と唄に歌われた小田急線沿線の地、東京府北多摩郡砧村（現：東京都世田谷区成城）の開発である。荒垣恒明の「郊外を拓き、郊外に住まう」がそれにあたる。いま一つは、塩崎の「川島忠之助家のばあい」である。ジュール・ヴェルヌの『八十日間世界一周』の翻訳者であり、横浜正金銀行のリヨン出張所員でもあった川島忠之助による蓄財と貸地・貸家経営という柱である。その際に手がかりとなったのは、旅日記とはいいがたいが、便船のたびごとにフランスから故国の姉にあてた日次、月次にも準ずる膨大な書簡群（明治15年〈1882〉～明治28年〈1895〉）、さらには姉・妻および長男の嫁の手になる家計簿の束であった。どうやら忠之助は後日、書簡をもとに『フランス事情』とでも銘打った著述をものすることによって、ジャーナリストとして立とうとしていたようである。塩崎はまた、『東西南北2014』に「実業と文学のはざままで——横浜正金銀行リヨン出張所員・川島忠之助訳述『俗名薄命才子』の位相」なる小文を寄せた。これまた、観劇日誌の一端と位置付けてよいものである。

こうしたプロセスのなかで、ごく自然に育まれたのが2012～13年度研究プロジェクト「幕末・維新期の旅日記を読む——岡山・近藤家文書を中心に」（代表：奥須磨子）の研究課題であった。寺島宏貴論文にいうように、「近藤家文書」は奥所員によって古書肆から偶然に入手されたものである。そうではあるが、福井家と同様、これまた市井に生きた無名の人びとのくらしと文化の様態が顕著に

うかがわれる。それというのも、これらの文書群は備前国児島郡と京・大坂、あるいは伊勢・金毘羅・出雲などの名所を往来する旅日記群であるとともに、その間の商取引や出納簿の性格をも色濃く帯びているからである。「福井家文書」や川島忠之助の書簡群と彼此相通ずるところが多い、といっても過言ではない。

近藤家は備前国児島郡銚立村番田（現：岡山県玉野市番田）に住し、幕末ころから醬油醸造業によって財を成した家である。旅日記の筆者近藤三郎二（天保8年〈1837〉～明治43年〈1910〉）は家業に出精するかたわら、村政にも重役として携わった。三郎二はまた、復堂と号した。今回、主として扱った慶応4年（1868）4月および9月の上京日記は、復堂が商用かたがた京見物をした、もしくは京見物がてら取引先に挨拶まわりをした記録である。歴史の転換期にあたるこの年、復堂は30歳の壮年に達していた。ことからの詳細は、本号に掲載する寺島・荒垣の論考につまびらかである。なお、本プロジェクトに謳った〈幕末・維新期の旅〉という括弧を〈19世紀の旅〉に改めたいという寺島の提言もあったが、しばらく当初の案に従っておく。

ところで、今回のプロジェクトに先だって、福井家の人びとが本湊町に生活の基盤を置きながら近くは雑司ヶ谷の鬼子母神などへの社寺参詣、遠くは熱海での湯治、鎌倉への避暑といった具合に、都市〈東京〉における余暇をいかに消費したかについても考察した。長尾洋子の「生きられたレジャー革命」がそれにあたる。ただし、この考察は大正・昭和戦前期に降るばかりか、交通・産業の進展によって促された旅の商品化と余暇の享受に照準を合わせている。それに対して、今回の調査は鉄道網が整備される以前の移動に主眼を置いた。したがって、そこに立ち現われてくるのは、商用と物見遊山、情報収集（各地の名産品の入手も含めて）と社寺参詣（ばあいによっては真摯な信仰生活）等々が、個別に分節化される以前の「旅」—まるごとの生活体験としての移動—の様相である。

こうしたもくろみのもとに鈴木努が中心となり、荒垣恒明・寺島宏貴がこれに協力するかたちで近藤家史料45点を整理し、史料リストを作成した。その上で、翻刻対象史料27点（作成者および作成年月の明らかな旅日記）を選び出し、幕末・維新期の23点の判読および翻刻を終えた。そうした作業を踏まえて、寺島論文は「近藤家文書」の全貌を目録化し、史料の特質と価値とを考量しようとしたものである。荒垣論文は慶応4年（1868）4月および9月の近藤復堂の上京日記そのものと取り組み、旅の実態を跡付けようとした論述である。

それらに対して、奥論文は同時期に郷国から江戸や京都に出府する際に履まなければならない諸手続きを法制史の観点から洗い直し、日常生活と旅の連続／非連続性を検討したものである。内田正夫論文は、ドイツでホフマンやペッテンコーフェルなどに衛生学を学んだ中浜東一郎（ジョン万次郎の息、東京衛生試験所所長）の筆になる、明治24年（1891）の長崎・下関出張（水際作戦によるコレラ防疫）と濃尾地震の被災地の視察という、二度にわたる公務出張の足取りを辿

ったものである。

ちなみに、鈴木・塩崎は明治15年(1882)から明治28年(1895)にわたる川島忠之助のリヨン生活、とりわけ明治21年(1888)に再婚相手の^{かたこ}方子とともにした新婚旅行を兼ねた渡仏の旅程をこもごもに綴った故国あての消息群の整理に当たったが、これは稿を成すにいたらなかった。

「近藤家文書」の翻刻・解説は、重箱の隅をつつく作業にも似ている。また「近藤家文書」とそれ以外の史料のつきあわせは、いかにも牽強付会のようにみえなくもない。しかし、幕末・維新期の旅日記をそれに続く近代の旅の特徴と比較・考究することは、日々の生活から切り離された旅ではなく、くらしとともにあった旅を考えたいという志に発している。こうしたところみを、成島柳北の『航西日乗』(柳北と川島忠之助のバリやイタリア諸都市の足取りは、10年ほどのタイム・ラグを隔てて、驚くほどの相似形をかたちづくっている)や、森鷗外の『独逸日記』(中浜が学んだホフマンやペッテンコーフェルに鷗外も師事したことはよく知られている)のかたわらに置き、何が炙り出されてくるかを考究したいのである。

それとともに、これらの旅日記群の考察には、いまひとつ重要な課題が伏在している。旅日記は「来た、見た、買った」の記録である。行く先ざきで矢立を取り出し、そのときどきの見聞を走り書きしたメモの堆積といってもよい。いうまでもなく、こうした記録の第一読者は記述者本人である。中浜東一郎のばあいが顕著に示すように、それらは後日作成されるはずの復命書の下書きの役割を担うものと考えてよい。しかしながら、帰国後の公刊を企図しながらも成らなかった川島忠之助のばあいを引き合いに出すまでもなく、そうした稿本の役割を果たすケースはきわめて稀だったのである。よほどの幸運に恵まれないかぎり、それらの多くは公刊されるどころか、子々孫々を含めて第二、第三の読者の眼に触れることもなく、長く^{きょうてい}筐底に秘められたまま忘れ去られるか、散逸されるしかなかったのである。近藤三郎二のばあいは、稿本という意識があったのかすら疑わしい。

にもかかわらず、近世・近代の識字層はおりに触れ、ときに触れて、夜々として旅日記を記述し続けたのである。ことは旅日記にとどまらない。閱讀した書物のさわりをもまた、〈抄録〉というかたちで記述し続けたノートが山積していることはよく知られている。こうした〈書きとめる〉行為自体に向けられた記述者の静かで熱い情熱は、旅の体験(もしくは読書体験)によって本人にもたらされた世界認識の新たな獲得のよろこびにあったのか、それとも近世・近代の識字層の抱いた牧民意識の涵養とでもいったものに支えられていたのかをも考えてみたいのである。

だが、〈江戸随筆〉として括られるこれらの史料の山嶺の高さと裾野の広さに思いをいたすとき、この企てはあまりに望蜀に過ぎるというものであろうか。

[しおざき ふみお]